

## 多摩川（東京都）

大橋貴良

Q 1. 今住んでいる所（あるいは幼い頃育った所）の近くを流れている川の名前をひとつあげ（\*）、

私は今現在東京都の八王子市と多摩市の境に住んでいる。距離として一番家に近いところに大栗川という川があるのだが、最寄り駅までの道のりの反対側に流れているということもあり、年に一度もその川を見ることもない。その大栗川と比べて自宅からの距離はあるものの、私の人生で一番関わりが深かった川、多摩川を本稿では取り上げる。



Q 2. 今、どんな姿をしているか自分の目で見て描写（記述）しなさい。

今の季節、多摩川の水位は他の季節に比べて低く、流れも穏やかで、川自体の幅が狭く、河原の範囲が広がっている。河原や土手周りの草木は冬枯れていて全体的にはっきりとしないぼやけたような景色を呈している。この季節に限ったことではないが、かなり朝の早い時間帯から日が出ている間は釣りをしている人がちらほらと見える。また、川の流れの緩いところにカルガモなどのカモなどが泳いでいる。

Q 3. あなたとその川との関わりをできるだけ具体的に書きなさい。

（例えば、川／岸辺で遊んだ体験、川を見て感じたり、川の調査などをしたことなど）

多摩川(京王相模原線 京王稲田堤ー京王多摩川区間)は現在ICUに通学する際、バイトに行く際、友人に会いに新宿方面の電車に乗る際と、ほぼ一年中毎日のように電車の窓から目にしている川である。また、たまに学校帰りに多摩川沿いを自転車で走ったりしている。

多摩川には子供の頃から幾度も家族・友人と遊びに行った記憶がある。具体的には幼い頃、虫かごと網を持って河原にいるバッタやトカゲ、川にいる小魚やザリガニなどをつかまえるために遊び行ったことがまずあげられる。他にも

多摩川の流りに沿ってひたすら自転車を走らせ羽田空港のあたりまでサイクリングしたり、花火大会を観に行ったりと多摩川で遊んだ記憶は数多くある。高校生の頃に在籍していた川崎市麻生区の桐光学園高等学校が行っていた社会奉仕活動の一環で多摩川の清掃に行ったことがある。ボランティアで清掃に行くのだからしじられないくらい大量のゴミが放置されているのかと思っていたが、想像していたほどにゴミが落ちてはいなかった。恐らく日頃からいろいろな形で清掃作業が行われているからではないかと思う。

昨年の秋に大型の台風が東京を襲った際に、多摩川が氾濫した時(正確には氾濫が少し落ち着いて雨が上がってから)も多摩川の様子が気になって観に行ったことがある。土手沿いから河川敷へと続く遊歩道は封鎖されていたが、その水没した時に流されてきた木やら枝だらけになっている河川敷をマウンテンバイクで1時間ほど回ってみたことがある。その時目にした光景は私が未だかつて見たことの無い多摩川の風景だった。土手を降りてから川まで数十メートルほど芝生が生えているだけの河川敷があるのだが(草野球場やサッカーグラウンドがあったりする)、その河川敷が完全に湿地と化していた。周りが水浸しになっていて、自分の漕いでいる自転車が出す水しぶきの音、いつもの何倍もの推量で流れている多摩川の音、多摩川の上の陸橋をたまに通り行く電車の音の3つ以外ほとんど何の音もしなかった。それは一面水浸しになった河川敷がまるで雪が周りの音を吸収するかのごとくつくくりだした、雪の積もった日の静寂のそのものであった。

この静寂のなかで上で述べた3つの音がそれぞれひとつずつ際立って聞こえる不思議な空間だった。雪が音を吸収した

川の端にある青色の「一級河川 多摩川」の大きな看板が流された木やら枝やらで2メートルほど積もりあがって、ほとんど見えなくなっていたのが凄く印象的だった。

Q4. あなたの両親あるいは近所の人に20-30年前の川の様子を聞いて、その内容を記しなさい。

万葉集の時代にも「多摩川にさらす手作りさらさらになにそこの児のここだかなしき」(東歌)にもあるように、多摩川で戦前まで染色(布を晒す)していたと言われている。多摩川の左岸にあたる調布は布を税である「調」として納めて

いたことに地名が由来する。また、狛江は狛の人たち(渡来系の人たち)が住んで機織りをしていたことでも知れている。狛江の江は多摩川が地形的に入り組んだ湾状になっていたことを示している。このように古来より多摩川の周辺に暮らす人々の暮らしに密着していたことがわかる。

私の両親は東京出身ではなく、また両親と私が今住んでいる多摩ニュータウンの西端の団地自体が出来てからまだ10年あまりであるため、20-30年前の多摩川について詳しくは知らない。

そこで、母の知り合いの狛江在住の70代の女性民俗学研究者の話によれば、調布や狛江の昔話には多摩川にまつわる話が多いという。狐火に誘われて行き着いた先が多摩川であったという話もある。また、戦前まで多摩川で捕ったスズムシやコオロギなどを東京市中へ売りにいていたという。また、よく水が出る(洪水が発生しやすい)ところであったという。

中でも1974年の多摩川水害については狛江の民家が台風16号により19戸も流され、大変なものであったという。テレビのニュースで民家が多摩川に飲み込まれ流されるシーンが何度も放送されたために、当時福岡や京都に住んでいた私の両親も記憶に鮮明に残っているという。また、多摩川の水害を扱った「岸辺のアルバム」というテレビドラマが話題を呼び、日本全国の衆目を集めることとなった。昨年の多摩川の増水時に多くのメディアが駆けつけこと細かく水位を煽情的に報道をしていたのも、多くの人々の記憶の中にこの1974年の多摩川水害が強く残っていたからであろう。私は1986年生まれのため、この出来事を知らずに育ち、今回の増水で過去にこのような水害があったこと、「多摩川」が水害の象徴的な存在であることを初めて知った。

1974年の水害を契機に多摩川を管理する国の責任が問われたこともあり、その後、多摩川の河川工事が進み、現在のような市民の憩いの場所としての多摩川が作られていくこととなった。

Q5. その川についてのWeb-siteがあるかを検索し、そこに書かれている事柄の要旨を書きなさい。

「国土交通省関東地方整備局京浜河川事務所 | 多摩川」

<http://www.keihin.ktr.mlit.go.jp/tama/index.htm>

という国土交通省京浜河川事務所のページが多摩川のサイトとなっている。このページには他にもこの京浜河川事務所が管轄する鶴見川、相模川、沖ノ島

島の詳細ページも兼ねているものである。

多摩川のトップページには多摩川の最新情報・ニュースを扱う多摩川 Topics が掲載されている。このページは大きく分けて「多摩川とは?」「知りたい!」「利用したい!」「参加したい!」「プロジェクト」の5つに別けられている。今まで何となく知っているつもりだった多摩川の歴史や行ったことも無い多摩川の上流の景勝地についての記述がこと細かくあって興味深かった。特に個人的に多摩川の生物に関する項目が鳥類・魚類・植物と3つのジャンルにおいてそれぞれ図鑑形式でこれまた詳しく説明がなされていたのが良かったと思う。

また、この多摩川のサイトだけでなく、「多摩川」を検索してわかった点として、多摩川は行政レベルにおいても市民レベルにおいても数多くの取り組みが行われているということであった。

Q6. あなたは、その川がどんな存在であってほしいと思いますか?

以上のことから、多摩川そのものの川としての自然的要素の保存、生態系保存の重要性、それと同時に多くの人々が楽しく安全に川を憩いの場とすることが出来るような川であって欲しいと思う。

自然災害を防ぐことを第1目的として護岸工事を優先すれば、人々が訪ねたくなる「自然の風景」としての川がなくなり、憩いの場として機能しなくなってしまう。今後とも、川との共存をはかるためには「安全な川」であると同時に、どこまで自然のままの川を残すことが出来るかの折り合いのつけ方が問題となってくるであろう。

多摩川が氾濫などによる水害を防ぎ、人々が安心して憩いの場として利用できる川であり続けて欲しいと願っている。

自然と人間が共存できるシンボルとなるような多摩川であって欲しい。